

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

12

2018

にーせろにーせろ

特集 日本2020食品産業の戦略



AFCフォーラム 12

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2018

特集

にーぜろにーぜろ

日本2020食品産業の戦略

3 老舗和菓子メーカーのコラボ商品開発

中丸 輝江

「需要を引き出す新たな価値創造」に向け他社との連携で商品を開発し、新たな需要を掘り起こすと共に自社ブランド力向上を実現する和菓子メーカーに話を聞く

7 市場のニーズを先読み、いち早く海外展開

村田 泰夫

伝統食品である味噌の業界にあって、輸出に活路を見出した味噌メーカーの輸出戦略と具体的な取り組みから、食品産業戦略の一つ「海外市場の開拓」の在り方を考えよう

11 生産効率化で、先ず生産性向上を図る

弘中 泰雅

食品製造業はその特性により生産性向上が他業種より大幅に遅れた。ロボットやAIを導入する前に、まず現場をライン化、分業化するなどの見直しが急務だ

特別企画

15 平成30年度アグリフードEXPO輝く経営大賞 ～駆け上がる地域農業の担い手たち～

有限会社ひるがのラファノス／岐阜県

経営紹介

経営紹介

23 株式会社上田畜産／兵庫県

上田 伸也

但馬牛の繁殖・肥育一貫経営で独自ブランド「但馬玄」を展開、消費者からも高い評価を受ける。絶対の自信を持つという「おいしさ」はいかにつくられるのか

変革は人にあり

27 藏ウェルフェアサービス株式会社／大阪府

藤岡 和子

「福祉給食のバイオニア」と自任し高齢者福祉施設へ「楽食」を提供する。人手不足と食品安全に対応しようとHACCP方式のセントラルキッチンを導入した

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：飯田 裕子

千葉県南房総市
2016年冬撮影

ストックの花畑

■黒潮の恩恵を受けて冬でも温暖な南房総では花の栽培が盛んだ。日本各地に切り花として出荷されるストックのハウスは花の香りに満たされている ■

シリーズ・その他

観天望気

食品産業戦略 中嶋 康博 2

農と食の邂逅

前岡 美華子／鳥取県
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

耳よりの話 200回

和牛の受胎率が下がっている？ 平子 誠 22

主張・多論百出

株式会社マネーフォワード 瀧 俊雄 25

書評

ユヴァル・ノア・ハラリ 著、柴田 裕之 訳
『サピエンス全史 上・下』
宇根 豊 30

まちづくりむらづくり

どこにも負けない農家レストラン
成功も失敗も、笑顔でネコバる！
清流の会 会長／秋田県南秋田郡五城目町
金澤 幸則 31

AFCフォーラム総目次(2018年1月号～12月号) 34

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第12回アグリフードEXPO大阪2019 38

1月号予告

特集は「未来へ、『和』の伝統飲料」を予定。

人口減少のうねりを直接的に受ける食品産業。その中であって、日本酒、茶、だしなど『和』の伝統飲料が新規需要開拓へ目覚ましい成果を上げている。手間が掛かるなど従前のイメージを覆す商品開発、慣れ親しんでもらうための斬新かつユニークな取り組みなどさまざまな方策が功を奏した。日本酒、茶、だしという3分野の取り組みから、『和』の伝統飲料の未来形を展望する。

望天 観気

食品産業戦略

農林水産省は、今年四月に「食品産業戦略―食品産業の二〇二〇年代ビジョン」を公表した。食料産業局長主催の食品産業戦略会議を昨年の五月末から九回開催し、その報告書として取りまとめられたもので、「日本の食品産業の鳥瞰図を示し、一方、食品事業者には自らの立ち位置を確認し、新たな活動に一步を踏み出すためのきっかけになることを目指している」と戦略の目的が記載される。筆者はその会議に参加したが、全体を通じた印象として以下の二点を指摘したい。

第一に低い付加価値、低い労働生産性の克服が共通の課題だった。設備投資不足のため、老朽化した効率の悪い施設のまま操業を続ける事業者が多い。その解決のため、更新に合わせて、AIやロボット技術を導入することへの強い期待が示されていた。

第二に海外ビジネス展開への可能性が強く意識されていた。わが国の飲食料市場が人口減少によってさらに縮小することが確実だからだ。日本製品の品質の高さは世界的に認知されている、海外展開するには高コストで価格競争力がなく安い類似商品が出回るなどブランド管理が難しいこと、ESG（環境・社会・ガバナンス）に配慮した事業活動の必要性など国際的なビジネス規範の重要性が指摘された。

その他の課題も取りまとめた上で、報告書では、食品産業戦略の方向性としてトリプル・スリー、すなわち付加価値額三割増、海外売り上げ三割増、労働生産性の三割増が提起され、その実現のための三つの戦略が示された。需要を引き出す新たな価値創造、海外市場の開拓、自動化や働き方改革による労働生産性の向上である。以上の戦略に加えて、生産拠点としての危機管理と環境整備について、BCP、事業承継、取引の適正化、「食」の信頼の確保など、持続的経営を実現するために多角的な検討を行った。国内外のマーケットの可能性を切り拓き、新時代の技術の積極的な適用に挑むため、攻めの食品産業政策の方向が示されている。本報告書だけでなく、農林水産省ウェブ上にある本会議の各回の議事要旨にも目を通されることをお勧めしたい。

東京大学大学院農学生命科学研究科教授

中嶋 康博



なかしま やすひろ

1959年埼玉県生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了（農学博士）。東京大学助手、助教授、准教授を経て、2012年より現職。現在、日本フードシステム学会会長、食料・農業・農村政策審議会会長、日本農林規格調査会会長。専門は農業経済学、フードシステム論。

農業を軸にして
集まって来る人たち
思い思いに物語を紡ぎ
好きなことで
笑顔になってほしい

農と食
の邂逅

前岡 美華子 さん

鳥取県鳥取市

株式会社兔ッ兔 代表取締役

静かなワインブームの中で、日本各地にワイナリーが増え始めている。病院看護師から転身し、果実酒特区に指定され、自前の畑で作ったブドウを自前の醸造所でワインを造る。食にかかわる農業に無限の可能性を拡げる。





P19: 美華子さん(左)は兵庫県栗原市出身。兎ッ兎ワイナリーの由来を「鳥取と似た響きで、神話『因幡の白ウサギ』にちなんでいること、一歩一歩ととととと前に進めるように」と話す P20:化学肥料、除草剤は使わず、刈り取った草の土中微生物分解により土を作る(右上) ワインの種類によってラベルの色を変える。二匹の兎が向き合う様が印象的(右下) 全員で植えたブドウは兎ッ兎ワイナリーのシンボリック的存在(左)

農業が持つ可能性を信じて

「単にワインを造るというより、この場所を舞台に物語を紡いでいきたい」

スタッフ全員で植えたブドウの樹を眺め、前岡美華子さん(五二歳)が言う。美華子さんが立ち上げた兎ッ兎ワイナリーでは、山ブドウ系を基本にさまざまな品種を組み合わせたワインを造る。

「人を応援する仕事に就きたい」と看護師の道を選んだ。大学を卒業後、兵庫県内の病院の心臓血管外科で生死をさまよう患者たちのケアに当たった。「出勤途中に、顎の辺りがぬれていて、手で触ってみたら涙でした。死に直面する毎日に、若かった自分の気持ちがついていかなかったのかも」

結婚し、三人の男の子に恵まれた。「子育てほどすてきな仕事はない」と感じる一方、子どもへの接し方に悩む時期もあった。そんなとき、コミュニケーションスキルの一つであるコーチングに出会った。最も大事なことは、「相手に丸を付ける」ことだと教わった。相手の弱点を直そうとするのではなく、話を聞き、強みを引き出すやり方だ。

気付けば、コーチングを周りの人たちに伝えるようになっていた。今から約二〇年前のことだ。児童相談所の職員を相手にセミナーを行い、シンゲルマザーの相談相手にもなった。コーチングの資格も取得したが、「実際に悩みを抱えている人に『こういうケーススタディーがありますよ』と事例

を引き合いに出すようなやり方には疑問がありました」。実際の生活の中で悩みを分かち合い、共に道を探せる場所があれば、という想いが徐々に膨らんでいった。

仕事を通じ、発達に課題のある子どもたちとも接し、成長後に就労する時点で壁に直面していることも知った。進みたい道や就きたい仕事があっても、受け皿が十分でない状況を何とかできないかと長年思い続けてきた。

そんな美華子さんの心の中で徐々に大きくなっていった存在。それが農業、そして六次産業化だった。農業にはさまざまな仕事がある。ましてや生産、加工、流通、販売までを網羅する六次産業化は多くの人が関わる。美華子さん自身も日々の暮らしの中で、食を大切にしてきた。コーチングを通じて知り合った人から聞いた「人は食べたものでできている」との一言もずっと脳裏にあった。食の原点である農業は、美華子さんにとって近い存在だった。「農業を軸に福祉、子育て、医療などを実践していける場所をつくりたい」。休耕地であった義父の一畝の農地で、美華子さんは二〇〇七年から生食用とワイン用のブドウ栽培を始めた。

手を差し伸べてくれた多くの人々

ブドウを選んだのは、農地がある国府町がブドウの産地であり、美華子さんがワインの魅力にはまっていたから。排水性が良く、風通しや日照時間の長さなどブドウ裁

培にはもってこいの土地だ。とはいえ、農業は全くの未経験。一人で土起こし、ブドウの棚作りから栽培までやってきた。現在、社員として働く田中悦子さん(五七歳)に「一〇年間、ほぼ一人でやってここまでできた。よほどしっかりした目標がないとできない」と言われて「一人じゃないですよ。実に多く



左奥が2017年に完成したワイナリー。近くの智頭(ちず)町特産の「智頭杉」を使った建物はぬくもりが感じられ、周囲の景色ともマッチしている

の人が手を差し伸べてくれました。人には本当に恵まれている」と美華子さんは微笑む。

ワイン用ブドウが収穫できるようになると、近隣のワイナリーに醸造を委託した。そのワイナリーが仲介役となり、京都府在住のブドウ栽培家、梅垣誠さん(六一歳)と知

り合った。美華子さんの想いに共感した梅垣さんはブドウ作りを一から教えてくれ、励ましてくれた。作業を手伝う人々も徐々に現れた。現在、ワイン醸造責任者の寺谷英樹さん(五一歳)もその一人だ。

子どもたちが手伝いに来るようになった。「大人になったら農業をやりたい。だって作ったものを食べれば、みんな笑顔になる」と話す子は、飽きることなく作業をこなした。すると、その保護者も手伝う、というようにどんどん輪が広がった。作業をして、美華子さんたちと話をすると、兎ッ兎ワイナリーを心のよりどころにする人たちも多い。

元気の連鎖を広げていきたい

委託醸造によるワインには、オリジナルラベルを付けて年間一〇〇〇程度販売してきたが、収穫時期と醸造時期が開くなど、常にベストな状態でワインができるわけではなかった。梅垣さんからも「ブドウ栽培からワイン造りまでやってこそ、マルになる(完成する)よ」と背中を押された。二〇一六年、鳥取市と八頭町が「果実酒特区」に指定され、酒造免許取得に必要な最低製造数量の基準が下がったことから、免許を取得。一七年四月、鳥取県の補助金と融資を活用し、畑のすぐ横に兎ッ兎ワイナリーを建て、秋からワイン造りが始まった。

「ワインの味は、ほぼブドウの出来で決まる」と言う寺谷さんは、一年のうち九カ月はブドウ畑の管理をする。「樹の様子を見れば、水を欲しがっているか分かります」と言う。一八年夏、鳥取市は日中四〇度を超える日が続いた。それでも、ほ場での管理を続ける寺谷さんに、美華子さんは小休止を促した。「なおも手を止めることなく、『こいつらもな。頑張っている』と作業を続けていました。そういう人です」とねぎらう。一方の寺谷さんも「日本各地にワイナリーが増えていますが、自前の畑で作ったブドウを自前の醸造施設でワインにしているところは多くはない。ここは小規模だからできる」と満面の笑みで話す。

兎ッ兎ワイナリーで仕込んだ一七年の赤白、ロゼのワインは事前予約だけで売り切れた。それだけ、ワイナリーに関わっている人、支えている人が多い証しだ。中には「(自分が)死ぬまで送り続けてな」と話す熱烈なファンもいるそう。

ワイナリーがフル稼働すれば年間一百万本を出荷できるというが、本数を増やすだけがゴールではない。「農業がやってみたい」「食と関わりたい」という人をできる限り多く受け入れ、就農訓練の場所にしていくことが目標だ。

「好きなことができれば本人が笑顔になる。すると両親、祖父母が元気になり、それが地域の元気になると思うんです」。集まってくる人たちが農を軸に思い思いの物語を紡いでいく。そして笑顔が広がる。これこそが美華子さんの願いなのだろう。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

和牛の受胎率が下がっている？

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

畜産研究部門 家畜育種繁殖研究領域長

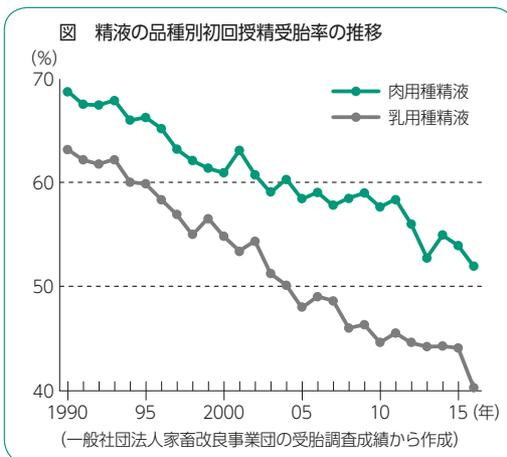
平子 誠

わが国は、少子化が進行し、人口減少社会を迎えています。一方、出産を望む女性の高齢化などにより、生殖補助医療によって生まれる子どもの割合は増加しています。畜産関係者以外にはあまり知られていない

かもしれませんが、実は平成年代になってから、家畜の牛も妊娠しにくい傾向が続いています。牛は人と違って生殖年齢が上昇しているわけではなく、生産性を向上させたことが原因ですが、人も牛も働き過ぎという意味では根は同じかもしれません。

(一社)家畜改良事業団では各地の家畜人工授精師の協力を得て、同事業団が配布した凍結精液の品種別に、授精した雌牛の受胎状況を調査し、年ごとの受胎率を公表しています。主要な産地である北海道が調査対象に入っていないのは気になります。最新の二〇一六年調査では、全国の繁殖用雌牛の二〇程度に当たる約四万頭の受胎率のデータを収集しています。

その調査成績を見ると、一九九〇年頃までは肉用種の受胎率が六〇%台後半、乳用種が六〇%台前半の水準で推移していたのですが、九三年頃を境に減少し始め、その後は年を追って低下し、直近では肉用種が五二%、乳用種が四〇%まで下がりました(図)。

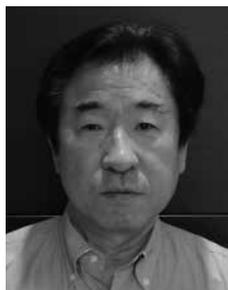


この数字だけを見ると、和牛(肉用繁殖雌牛)の受胎率が一〇%以上下がったことは明らかで、なぜタイトルに「？」マークが付いているのか疑問に思われるでしょう。実は、乳用種の精液はほぼ全て乳牛に授精されるのですが、肉用種の精液は、和牛だけでなく、肉用として乳牛牛より高く売れる交雑種を生産するため乳牛にも授精されているのです。(一社)日本家畜人工授精師協会の調査では、乳牛の約三分の一北海道を除けば約四五%)

が肉用種の精液を授精されています。乳牛の受胎率低下は世界的な傾向で原因もかなり分かっています。乳牛の繁殖の実情が影響しているため、和牛の受胎率も下がっているのはつきりしないのです。

肉用種精液の受胎率から乳牛への授精を考慮して和牛間だけの受胎率を推計すると、低下した十数%のうち、三〜四%は和牛自体に起因するようです。特定の種雄牛に人気が集まり近交度が上がったから、あるいは脂肪交雑が増えホルモンバランスが乱れたからなどの原因が考えられますが、誤差もあり実際のところは分かりません。

乳牛の受胎率低下の轍を踏まないよう、和牛の受胎率ももっと正確に把握する必要があります。F



Profile

ひらかま こと
1958年長崎県生まれ。北海道大学大学院獣医学研究科修士課程修了後、農林水産省入省、畜産試験場繁殖部に配属。草地試験場放牧利用部、農研機構本部などを経て、2017年から現職。獣医学博士。専門は家畜、特に牛の繁殖に関する研究。

株式会社マネーフォワード 取締役
Fintech 研究所長

瀧 俊雄



●たぎとしお●
一九八一年東京都生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、野村證券株式会社に入社。株式会社野村資本市場研究所にて家計行動・年金制度、金融機関ビジネスモデルなどの研究業務に従事。スタンフォード大学 MBA、野村ホールディングス株式会社の企画部門を経て、二〇一二年よりマネーフォワードの設立に参画。経済産業省「産業・金融・IT 融合に関する研究会」に参加。金融庁「フィンテック・ベンチャーに関する有識者会議」メンバー。

金

融業界では近年、「フィンテック」と呼ばれる潮流が話題となっている。とかく難しく思われがちな金融(Finance)サービスを、技術(Technology)の力によって分かりやすく使えるようにするものだ。しかしこの動きは、これまで融資や支払いの中心にいた金融機関という存在に再定義を迫るものとなるのは確実だ。仮にグーグルやアマゾンといったIT企業が銀行サービスを開始した場合、その情報通信技術力などを駆使してかなり便利なものになることは間違いない。

農業においても、このフィンテックの技術は徐々に応用されつつある。今後生まれてくる影響をキャッシュレス化、データの活用、信用創造という三つの段階に分けて考えてみよう。

キャッシュレス化は二〇一七年以降、政府が目標値を定めて推進している一大テーマである。日本の個人消費において、現金による支払いが八〇%を占める中で、この比率は一〇年後には六〇%、さらには

二〇%まで引き下げられていく予定である。

キャッシュレス化のメリットはATMに行く手間や、レジ締め作業を削減するだけではない。それまで現金支払いという手段で「捨てられてきた」情報ともいえる、消費者がどのような顧客属性であるのか、店舗で何時頃の売り上げが大きいのか、売れ筋の商品が何なのか、といった情報が、リニューアルされたレジや決済端末を通じてリアルタイムで共有されるようになる。

農業の現場に当てはめた場合、作物の機動的な配分や価格の変更ができる他、在庫の積み上がりに対してもいち早く対応することが可能となる。飲食の現場などでも既に受発注の仕組みが自動化され、それが即座に伝票として経営者の参照する情報となりつつある中で、同じことが生産者や流通チャネルにおいても行われることは想像に難くない。

キャッシュレス化によって生まれたデータの活用は、会計ソフトや経営分析のシステムと連携するこ

とで、より強力な武器となる。クラウド型の会計ソフトを誰もが導入できるようになった今、経理や会計業務を必ずしも「社内」で行う必要はなく、遠隔操作で外部の税理士に入力や経理を委ねることも可能になった。

経営力をつける第一歩は自社の財務状況のリアルタイムな把握にあるといえるが、日本の中小事業者ではまだ、自社の帳簿を一〜二カ月遅れで見ることが常態化している。仮に資金の遊んでしまう期間を半減できれば、理論的には同じ運転資金で、事業者は二倍の事業を経営することができる。

土地改良区における複式簿記の導入が進み、生産性が業容拡大にそのままつながりやすい環境も生まれつつある中では、経営力の強い事業者同士が統合し、市場におけるプレゼンスを高めていくトレンドにも変わっていく可能性が十分にある。

そ して、データによる信用創造がある。帳簿や経営情報がリアルタイムで利用できるようになれば、その情報を外部の事業者や金融機関と共有することで、これまでの条件では得られなかった融資や資金の獲得が可能となる。

それは例えば、作付け・生産の過程で必要とされてきた資金が売れ行きや評判のデータから手付金のよりに回収できたり、取引先の質が評価されれば請求書の発行と同時に手数料を差し引いた入金がなされたり、といったことも可能となる。

優秀な経営状況であっても、年度の財務データに反映してから融資を得るのでは、変化の激しい消費者や流通チャネルに機動的に反応することも難しい。それよりも、経営の「いま」を反映した信用創造こそが、今後の別次元での収益性へとつながるものとなる。

これら一連の流れの中で共通するのは、データを経営力に変えられるか、というテーマである。六次産業化までを見据えた生産性向上を考えたときに、生産サイクルや保有している生産設備に事業が縛られるのではなく、消費者におけるトレンド変化と流通も含めた付加価値提供ができる生産者こそが評価される時代が来ようとしている。

そのような時代においては、農業経営の現場でフィンテックを起点とする情報を積極活用する力が、経営にますます差をつける要因となりつつあるのではないか。

F

フィンテックは金融の固定概念を覆す データを農業経営に活かす生産者たれ

『サピエンス全史 上・下』

ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳



(河出書房新社・各1,900円 税抜)

歴史は「語り」なんだ、と分かる

宇根豊

(百姓・思想家)

全世界で八〇〇万部も売れているのには、わけがある。歴史は歴史的な真実(過去自体)を記録するものではない。なぜなら、昔の人の思考法がほんとうに分かるはずがない。だからこそ、歴史は現代からの「語り直し」であるしかない。そのことが、この本でよく分かる。

約一万年ほど前に農耕が始まったが、人類はむしろ貧しくなった。なぜなら、食料が増えた以上に人口が増えたからだ。また家畜と一緒に暮らすようになって、天然痘や麻疹や結核などの感染症にかかるようになった。

それではどうして元の狩猟採集に戻らなかったのか、と著者は問う。こうした問いに答えるのが、本書の最大の特徴だ。その後帝国の時代がやってきて、やがて帝国も滅びても、決して人類は元の制度には戻ろうとしなかったのはなぜか、

と同じように著者は問い掛ける。答えはネタバレになるから紹介しないが、著者の「語り」は明快で、新鮮で、説得力がある。つくづく歴史は次々に「語り直し」され、更新されてこそ、豊かになるものだと感服した。

農業革命の語りはこうだ。「一万年前、小麦はただの野生の草に過ぎなかったが、数千年のうちに世界中で生育するようになった。小麦はサピエンスを操って、それを成し遂げた。」サピエンスの身体は農耕のために進化していなかった。で、椎間板ヘルニアや関節炎などの多くの疾患がもたらされた。「私たちが小麦を栽培化したのではなく、小麦が私たちが家畜化したのだ。」こういうふうには語られると脱帽する。

もうひとつ事例を挙げよう。人類は二五〇万年前に現れたが、長い間「取るに足りない動物」に過ぎなかった。ところが、七〜三万年前に認知革命で新しい思考法を身につけたホモ・サピエンスが登場したことで、世界は劇的に変化していく。アフリカを出て世界中に広がっていったサピエンスは、三万五〇〇〇年前に日本列島にもたどり着く。一方で、それまで人類がいなかったオーストラリア大陸に渡ったことで、警戒心を持っていなかった大型哺乳類のほとんどを滅ぼしてしまふ。そこで著者は断言する。「私たちの祖先は自然と調和して暮らしていたと主張する環境保護運動家を信じてはならない」「私たちサピエンスは、生物史上最も危険な種である」と。このまだ四〇歳の歴史学者の「語り」は尋常ではない。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年10月1日~10月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 サカナとヤクザ 暴力団の巨大資金源「密漁ビジネス」を追う	鈴木 智彦/著	小学館	¥1,600
2 農業崩壊 誰が日本の食を救うのか	吉田 忠則/著	日経BP社	¥1,800
3 私は「お魚系」開発コンサルタント アジア、アフリカ、中南米 国際協力最前線で36年間	土居 正典/著	WAVE出版	¥1,500
4 稼げる! 新農業ビジネスの始め方	山下 弘幸/著	すばる舎	¥1,500
5 食料・農業・農村白書(平成30年版)	農林水産省/編	日経印刷	¥2,600
6 日本の森林管理政策の展開 その内実と限界(これからの森林環境保全を考えるI)	柿澤 宏昭/著	日本林業調査会	¥2,000
7 「複合林産型」で創る国産材ビジネスの新潮流 川上・川下の新たな連携システムとは	遠藤 日雄/著	全国林業改良普及協会	¥3,000
8 欧米諸国の森林管理政策 改革の到達点(これからの森林環境保全を考えるII)	柿澤 宏昭/著	日本林業調査会	¥2,000
9 スマート農業のすすめ 次世代農業人【スマートファーマー】の心得	渡邊 智之/著、 産業開発機構/編	産業開発機構	¥1,800
10 食にまつわる55の不都合な真実	金丸 弘美/著	ディスカヴァー・トゥエンティワン	¥1,000



どごにも負けない農家レストラン 成功も失敗も、笑顔でネコバる！

秋田県南秋田郡五城目町
清流の会 会長 金澤 幸則



レストランは山の奥

私たちの住む馬場目・杉沢地域は、秋田県のJ R八郎潟駅から車で四〇分程の山の奥にある小さな集落です。源を秋田郡内最高峰の馬場目岳に発する清流・馬場目川の上流に位置しており、川のせせらぎと鳥のさえずりが聞こえる、山々の燃えるような緑に囲まれた風光明媚な農山村です。

二〇〇八年『おくりびと』で日本アカデミー賞を受賞した滝田洋二郎監督によるマンガ『釣りキチ三平』の実写版映画のロケ地となりました。撮影に利用された古民家の「三平の家」や「ネコバリ岩」には今でも多くの人が見学に訪れます。「ネコバリ岩」は高さ六メートルほどの巨岩で、天辺には天然の秋田スギやコナラが茂り、その根は空中を辿り傍らの山の地面に行きつくという不思議な光景をつくっています。

一方、基幹産業の林業衰退とともに地域は活

気を失い、現在の地域の総人口は一九九人、世帯数九〇戸で小学生五人、中学生一人、高校生三人です。六五歳以上は一〇八人で、高齢化率は五四％です。

でも人口減少や過疎化の進行を嘆いていてもしょうがありません。身の丈を無理に越えるようなことはせずとも、しかし、できそうなことは何でもネコバる私たち「清流の会」の取り組みをお話します。(わが町では、昔から「頑張る」とを「ネコバる」と言います。「けっぱる・けっぱれ」や、「ふんばる・ふんばれ」と同意語で、「ネコバって頑張れ！」などと言います。)

さて、本題の「清流の会」の活動ですが、地域の清掃、道路の草刈りなどはもちろん、農家レストラン「清流の森」と、清流の森に隣接する古民家を復元したかやぶき屋根の宿泊施設「盆城庵」の運営もしています。

今回、会員が「おもてなしではどこにも負けない」と自負している「清流の森」について取り上

げたいと思います。

地域食材一〇〇％

「清流の森」を実際に切り盛りしているのは女性会員四人です。メニュー開発から、厨房、接客などネコバってくれています。メニューは山の幸いっぱい地域の地域料理です。例えば、季節の野菜や山菜を楽しめる小鉢と、地域産米粉を利用した野菜天婦羅(一例を挙げれば、春はウド、タラノメ、ササゲケ、秋は菊、マイタケ他、まだまだいっぱい!)、イワナのムニエルなど。小鉢は月替わりで粘りを活かした山菜ミズのタタキ、行者ニンニクや山ワサビのしょうゆ漬は人気です。材料は、地域で採れたものばかり。地元農家の米や野菜、会員が採ってきた山菜やキノコやクリなど、近くの養殖場から魚を「清流の会」が仕入れることにより、地域でお金を回しています。

「清流の森」内では、直売コーナーを設けてお

profile

金澤 幸則 かねざわ ゆきのり

1962年秋田県大仙市生まれ。「清流の会」2代目会長として、地域活性化のために会員が思い付いた取り組みを積極的に実行している。婿養子で馬場目・杉沢地域に入り、衣料品製造業を営む。趣味は、山菜採り。ユーモアあふれると人からよく言われる。ササダケの天ぷらで日本酒を飲むのが好き。

清流の会

2007年設立。「昔懐かしい賑わいあふれる村の再生こそ地域活性化の軸になる」をコンセプトに、閉校となった杉沢小中学校で美術展の開催をしたり、農家レストラン「清流の森」の運営などさまざまな活動をしている。活動内容は会員のひらめきを大切に、楽しくおおらかにネコバっている。

り、地元農家の皆さんの農産物販売も大人気です。いつも品薄になるのが「スギナ茶」です。スギナは雑草の中の雑草といわれるにつきき草ですが、成分はミネラルの宝庫です。採取して綺麗に洗い、天日干ししてお茶にします。

「清流の森」には四〜一二月の営業期間中、年間三〇〇人以上のお客さまが来訪されます。馬場目川の溪流釣りを楽しんだり、自然あふれる周辺には他にも観光スポットがいくつもあり県外など遠くから訪れる方も多いです。「清流の森」を目当てに来てくださる方も少なくありません。都会の喧騒から逃れ、静かな環境で釣りなどを楽しみ、素朴ながらも真心込めて作った料理に舌鼓を打つ。非日常を感じているのでしよう。

二〇一一年の東日本大震災の後、しばらくの間は秋田県全体が災害の影響を受け、「清流の森」への客足も激減しましたが、メディアや来訪者の口コミなどで再びお客さまが増えてきました。

小中学校閉校の衝撃

「清流の会」の立ち上げには、地域住民の心よりどころの小中学校の閉校が大きく関わっています。

馬場目・杉沢地域は天然秋田スギや木炭の大生産地として、藩政時代から一九七〇年代中ごろまでは、林業で大いに栄えていました。トロッコ列車が七一年まで活躍し、木材のみならず集落の人々や生活物資、時には花嫁さんまで

運んだものです。

しかしスギは切り尽くされ、山は荒れて林業は衰退。そのまま人口減少・過疎化の進行へとつながっていきました。危機感を募らせた地域住民たちは、「子のため・孫のため・地域のため」を合言葉に、地域を挙げて学校改築運動に取り組みました。これが実を結び、九二年には杉沢小中学校が新築されたのです。

ところが、喜びは長くは続きませんでした。児童生徒数は横ばいか、うまくいけば増えるかもと期待されていましたが、人口減に歯止めをかけることはできず、二〇〇六年にとうとう閉校となってしまったのです。

当時、私は最後のPTA会長を務めていました。閉校式ではスライドが上映され懐かしい写



上：農家レストラン「清流の森」

下：馬場目川の源流近くにある「ネコバリ岩」。独特の景観をつくる

真や人物が映し出されると「おおー」とか「俺が写った」と声が上がリ、会場はにぎやかな様子でした。ところが、ある時からシーンと静まり返りました。「これで終わりだ」「学校がなくなる……」。覚悟はしていたものの、実際にその時を迎え、厳しい現実を前に、地域の誰もが言葉を失ってしまったのです。涙する人も多くいました。

そして、学校から子どもたちの歓声が消え、しばらくたった頃です。「学校はなくなりましたが、校舎はまだ立派だ」「皆で奇麗にして何かやろう」という声が、あちこちから上がるようになりました。皆の心のどこかに、地域のよりどころであった学校がなくなり、このままでは住民が精神的にも離散してしまうのではないだろうか、という危機感があつたのです。

幸いにも、地域の全戸が加入する「杉沢地区コミュニティ」という組織があつたので、校舎内の部屋を借りて、そこを拠点として校舎周辺の草刈りや掃除を始めました。

そこから、より地域のためにできることをしようとする自然発生的に高齢者が中心となって立ち上げたのが「清流の会」です。名称ですが、馬場目川の「清流」にちなんで「清流会」にしようと呼び盛りがつたところ、一人が「何だか危ない団体と間違えられそうだと、心配から待ったの声が上がり」「の」を付けることになったのです。

温泉掘削はみごとに失敗

「清流の会」が「清流の森」の運営に関わるようになった経緯を書きたいと思えます。

会を設立し地域おこしへの情熱はあるものの、やり方を知らない私たちですから、会員の「こんなことはどうだろうか」という発想・発言を大事にして、思い付いたことをとにかくやり始めました。

例えば、杉沢小中学校出身者でエチオピアに行き、青年海外協力隊で活躍した青年の「帰国報告会」や、町出身の日本画家、館岡栗山画伯の作品展「示と御子息や親戚を招いて」「栗山、人と作品を語る会」を開催しました。五城目町と姉妹都市提携を結んでいる千代田区や東京のふるさと五城目会に「山菜パック」を送り始めたのもこの頃からです。関東圏のスーパーにミズ(ウワバミソウ)を送ったところ、全然売れずに困ってしまったので、問い合わせたら「食べ方が分からない」というので、現地まで出向いて料理実演をしたこともあります。

温泉掘削にもネコバって挑戦したんですよ。学校の裏にあるタヤノ沢に「硫黄が出ている」と言われていたことから、会員何人かでスコップ、つるはしなど持って掘りました。そのうちに硫黄の匂いはするし、手はツルツルしてきましたから「やった！温泉だ！」と喜んで、湧いた水をペットボトルに入れて県内の分析センターに送りました。温泉が出れば校舎の有効活用も地域の活性化も図れると大きく期待したのです。ワクワクして待った結果は「ただの水です……」と。さすがに、その時はどっと疲れがでました(笑)。

合言葉はネコバる

二〇〇八年、ビッグニュースが飛び込んでき

ました。『釣りキチ三平』の実写版映画のロケ地に馬場目が選ばれたのです。ロケ地の一つに、かやぶき民家がありました。実は、所有者が「家も古くなって維持が大変。取り壊そうと思っていた」ところ「保存を検討するので解体を待つてくれないか」と「清流の会」が打診、解体が延期になったタイミングでロケが決まったんです。今振り返っても、運命的なものを感じます。

さて〇九年、映画の上映が始まると映画を見た人がロケ地である当地域にどっと押し寄せました。困ったのはトイレと食事のできる場所の提供です。そこで一〇年四月、町は杉沢小中学校の冬季分校だった跡地を改装して、農家レストラン「清流の森」をオープンさせ、同年八月からの指定管理者を公募したのです。

もちろんそれを知った「清流の会」の会員は「挑戦しよう」で満場一致です。とにかくやってみて、失敗したら笑い飛ばして、次をネコバろうじゃないか——。

こうして、現在はレストランそばの宿泊施設「盆城庵」とともに「清流の会」が指定管理を受け管理・運営にネコバっています。

移住者の誘致に直結するような大きな取り組みにも挑戦したいという気持ちもあります。しかし私たちは、「仲良く助け合って暮らしていく」ことが何よりも大切ですから、できる取り組みを一つ一つ丁寧に行っていくと思います。

余力が出たら、今後も新しい取り組みにネコバります。きつと、成功もあれば、失敗もあることでしょう。でも明るく楽しくおおらかにやっていきたいと思います。

2018年1月号(第809号)

農業ニューウェイブ時代

■特集	生産者と消費者が支え合う農業・CSA エシカルなスタイルと農業の新時代 顧客獲得にクラウドファンディングも	波彦野 豪 山口 真奈美 柏木 智帆
■特別企画	新春 特別座談会／日本農業の力こぶ 新しい酒を古い革袋に入れるな！ 平成29年度アグリフードEXPO輝く経営大賞(西日本エリア) ～駆け上がる地域農業の担い手たち～ 農事組合法人秋香園／福岡県	
■経営紹介	有限会社見元園芸／高知県	
■親天望気	0.75%の水	丹羽 宇一郎
■農と食の邂逅	住 珠紀／愛知県	青山 浩子

■フォーラムエッセイ	タッパーの嫁 エプロンの嫁	今井 雅子
■耳よりな話	南からの厄介な訪問者ーアルボウイルスー	吉原 一浩
■まちづくりむらづくり	NPO法人でごねっと石見／島根県江津市	本宮 理恵
■書 評	岩間 信之 編著『都市のフードデザート問題 ソーシャル・キャピタルの低下が招く街なかの「食の砂漠」』	村田 泰夫
■インフォメーション	農業・林業・水産業経営アドバイザーシンポジウム開催	情報企画部
■その他	みんなの広場・編集後記 第11回アグリフードEXPO大阪2018	

2018年2月号(第810号)

迷路抜けるか、林業成長化

■特集	パリュチェーン化が創造する成長産業 林業成長化にはICT活用で供給力整備 パリュチェーン化の川上に価値還元	酒井 秀夫 赤堀 楠雄 田中 淳夫
■情報戦略レポート	原料原産地表示食品製造業者の約5割が 営業・販売戦略に活かせるかと向き ー2017年上半年期 食品産業動向調査ー	
■経営紹介	株式会社アグレス／長野県	
■変革は人にあり	井出 寿利 株式会社井出トマト農園／神奈川県	
■親天望気	くへの基盤	風見 正三
■農と食の邂逅	飯野 晃子／群馬県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	ふるさとに抱かれて	久嶋 美さち

■主張・多論百出	一般社団法人日本オオカミ協会	丸山 直樹
■耳よりな話	夜温管理から始まった複合環境制御	吉岡 宏
■まちづくりむらづくり	寒川水源亭／熊本県水俣市	寒川 正幸
■書 評	農業共済新聞 編 江口 祐輔 監修 『実践事例でわかる 獣害対策の新提案 地域で力を農作物を守る』	青木 宏高
■インフォメーション	水源を守る森林整備の講演会が盛況 蘭国のトマト工場の機械化にごよめき	京都支店 帯広支店
■交叉点	APRACA・研修団受け入れと理事会の参加	情報企画部
■その他	食品製造・加工業者の皆さまへ(HACCP資金のご案内) みんなの広場・編集後記 第11回アグリフードEXPO大阪2018	

2018年3月号(第811号)

1を100に変えた連携力

■特集	緊急報告！和牛日本一を手に「チーム鹿児島」の悲願 海外市場の要求はオールジャパン農産物 誌上戦略会議 みんなで考える「フードバレーとかち」の活力。 産業成長化にむかう地域農業の未来像	佐々木 幸良 坂井 紳一郎
■情報戦略レポート	茶が4年ぶり増収増益 畜産は経営規模拡大が必須 ー2016年 農業経営動向分析ー	
■経営紹介	有限会社旭養鶏舎／島根県	
■変革は人にあり	阿部 聡 株式会社イグナルファーム／宮城県	
■親天望気	メッセージのある農産物	平田 昌弘
■農と食の邂逅	平山 亜美／大分県	青山 浩子

■フォーラムエッセイ	ソウルフードの風景	William H. Coaldrake
■主張・多論百出	LIENS株式会社	亀山 初美
■耳よりな話	ヒツジに挑んだ秩父の営農者たち	加茂 幹男
■まちづくりむらづくり	四賀むらづくり株式会社／長野県松本市	金井 保志
■書 評	古沢 広祐 著『食べるってどんなこと？あなたと考たい命のつながりあい』	宇根 豊
■インフォメーション	畜産経営の環境や課題に活発な意見 テーマ別の分科会が参加者に好好評 よなよなエールの組織変革に学ぶ 農産物物流の講演会が盛況	奈良支店 福井支店 前橋支店 大分支店
■その他	認定農業者の皆さまへ みんなの広場・編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年4月号(第812号)

平成生まれ!! 農林漁業へ

■特集	発信力や共感力が農業の可能性広げる 農村と都市をつなぐ大学生のメディア 聞き書き 平成生まれの仕事場	原田 曜平 松田 恭子 特別取材班
■情報戦略レポート	労働力不足は設備投資で解決期待 ITに経営改善効果「施設もの」で顕著 ー2017年上半年期 農業景況調査における特別設問の分析結果ー	
■経営紹介	株式会社社長谷川農場／栃木県	
■変革は人にあり	西辻 一真 株式会社マイファーム／京都府	
■親天望気	曖昧模糊とした	柳村 俊介
■農と食の邂逅	門脇 富士美／秋田県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	宗教と食の来由	露の団姫

■長崎宣言	10年先の水産業・まき網漁業を考える	情報企画部
■耳よりな話	食品害虫管理に画像解析技術	曲山 幸生
■まちづくりむらづくり	木城市駄留地区鳥獣被害対策協議会／宮城県児湯郡木城町	平木 昭博
■書 評	赤堀 楠雄 著『林や宮木 木の価値を高める技術と経営』	村田 泰夫
■インフォメーション	第13回「アグリフードEXPO東京2018」を開催します DNPのパッケージ戦略と商品企画に学ぶ 近畿エリアの特長を活かし三事業協力で開催 「アグリフードEXPO大阪2018」来場者数過去最多	情報企画部 金沢支店 近畿地区総括課 情報企画部
■その他	みんなの広場・編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年5月号(第813号)

1億2670万人の食料安保

■特集	農村の社会・自然・人的資本を「丸ごと」 フードチェーン農業という食料安全保障 進化した食料安保論、財政・関税から「ルール」へ	柴田 明夫 大泉 一貫 石井 勇人
■情報戦略レポート	食の志向は世帯構成により大差 植物工場の野菜認知度や評価は向上 —2017年度下半期 消費者動向調査—	
■経営紹介	株式会社前田農園／和歌山県	
■変革は人にあり	四位 廣文 有限会社四位農園／宮崎県	
■観天望気	「世帯≠家族」	徳野 貞雄
■農と食の邂逅	小島 希世子／神奈川県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	究極の「外食」、バーベキュー	ただだバーベキュー

■主張・多論百出	株式会社ジャパン・インフォレックス	西田 邦生
■耳よりな話	ロボット時代の農業へ	藤村 博志
■まちづくりむらづくり	もんでこい丹生谷運営委員会／徳島県那賀郡那賀町	堤 貴昭
■書評	『月刊日本』2月号増刊『日本のお米が消える』	青木 宏高
■インフォメーション	IT利用の流通システムに関心集まる 農福連携や人材育成の重要性を認識 一次産品の付加価値を上げ世界で勝てる競争力を 経営理念と人材育成の大切さ学ぶ	甲府支店 長野支店 情報企画部 福岡支店
■その他	認定農業者の皆さまへ みんなの広場・編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年6月号(第814号)

日本農業は人手不足時代

■特集	優秀な農業人材の採用と育成が急務になる 外国人労働をめぐる農業生産構造の現実 私が理想とする農業と外国人労働のかたち	納口 るり子 石田 一喜 澤浦 彰治
■特別企画	もう一つの農業雇用 小暮都夫さんの実践に学ぶ 株式会社関東地区昔がえりの会	
■情報戦略レポート	農業景況DIは2年連続で過去最高値 GAPは認知者3割が認証を取得意向 —2017年下半年 農業景況調査—	
■経営紹介	株式会社オキス／鹿児島県	
■変革は人にあり	赤松 省一 有限会社赤松牧場／香川県	
■観天望気	ジェントロジーと農業	寺島 実郎

■農と食の邂逅	関 美絵子／兵庫県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	私の最善の食事	澤口 俊之
■耳よりな話	開発に20年を要したキャベツ収穫機	吉岡 宏
■書評	西川 芳昭 著『種子が消えればあなたも消える 共有か独占か』	宇根 豊
■交叉点	日本食市場の動向 in タイランド	
■インフォメーション	既存概念を超える女性経営者の発想力 メロン農家に学ぶ直販マーケティング 若手農業者の新たな交流の場に 金融機関が連携し六次化促進の展示会	札幌支店 秋田支店 高松支店 岡山支店
■その他	「事業性評価融資」のご案内 みんなの広場・編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年7月号(第815号)

農業界に「運べない」危機

■特集	人手不足の時代の物流効率化、コスト削減 同業他社を連携したスポーク輸送網構想を実現 物流内製化に成功した大規模野菜生産者	宮浦 浩司 山下 敏文 本田 和也
■情報戦略レポート	食品関係企業の5割は「GAPを知らない」と回答 景況DIマイナス幅拡大も18年上半年は上昇の見通し —2017年下半年 食品産業動向調査—	
■経営紹介	株式会社金子牧場／福島県	
■変革は人にあり	佐藤 睦 佐藤農場株式会社／佐賀県	
■観天望気	新たなこの国のかたち	田中 秀樹
■農と食の邂逅	橋本 志津／岩手県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	農道が私のランウェイ!	林 マヤ

■耳よりな話	サムライが生んだ名古屋コーチン	加茂 幹男
■まちづくりむらづくり	「古座川ジビエ振興協議会」事務局 古座川町役場 地域振興課／和歌山県東牟婁郡古座川町	細井 孝哲
■書評	農山漁村文化協会 編『むらの困りごと解決隊 実践に学ぶ地域運営組織』	村田 泰夫
■交叉点	タイを拠点にASEAN市場へ進出する	
■インフォメーション	情熱と創造力を活かした高校生ビジネスプラン募集 地域金融機関の役割と可能性を探る	グランプリ運営事務局 営業推進部
■その他	「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています 「事業性評価融資」のご案内 みんなの広場・編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年8月号(第816号)

すくくと、農業参入新時代

■特集	農業から生まれる効用を本業に取り込む 農業参入企業の誘致に自治体の期待 未知の領域の農業界へ新規参入企業	渋谷 往男 村田 泰夫 小澤 弘教
■情報戦略レポート	IT活用でスマート農業化 その先に出口はあるのか —統計と調査から見た農業の成長性と課題—	
■経営紹介	株式会社勝栄／山梨県	
■変革は人にあり	館 喜洋 農事組合法人 北辰農産／石川県	
■観天望気	なりわいを継ぐ	筒井 一伸
■農と食の邂逅	中井 結末衣／千葉県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	至福の一杯	増田 恵子

■主張・多論百出	技術士(農業部門)	鈴木 善人
■耳よりな話	緑肥を科学する	大谷 卓
■まちづくりむらづくり	一般社団法人フレッサ福岡／福岡県糸島市	前川 健太
■書評	小島 希世子 著 『ホームレス農園 命をつなぐ「農」を作る! 若き女性起業家の挑戦』	青木 宏高
■交叉点	タイ最大級の食品見本市「THAIFEX」に初出展	前橋支店
■その他	認定農業者の皆さまへ 編集後記 第13回アグリフードEXPO東京2018	

2018年9月号(第817号)

いっしょに漁業の成長化

■特集	漁船高齢化に漁船改革がカギを握る 魚活ボックスのレンタルの拓く活路 地の利を活かした養殖産業の競争力	平石 一夫 関山 正勝 松原 孝博
■情報戦略レポート	収益確保が最大の課題 技術習得向上進む回答も —2018年度 認定新規就農者フォローアップ調査— インタビュー 米田 茂之/山梨県 インタビュー 近藤 雅彰/香川県	
■経営紹介	有限会社橋口水産/長崎県	
■変革は人にあり	金子 崇範 有限会社月夜野きのご園/群馬県	
■観天望気	水産業改革の行方	山下 東子

■農と食の邂逅	坂井 美幸/新潟県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	風の強い日の旗として	夏井 いつき
■主張・多論百出	一般社団法人日本さかな検定協会	尾山 雅一
■耳よりな話	超音波でガを追い払う	中野 亮
■まちづくりむらづくり	株式会社信州せいしゅん村/長野県上田市	小林 一郎
■書 評	西垣 通 著『ビッグデータと人工知能 可能性と罠を見極める』	宇根 豊
■インフォメーション	日本公庫農林水産事業本部長の新任のごあいさつ 農業経営アドバイザーの活動を推進 東京大学と酪農経営について共同研究 「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定	情報企画部 帯広支店
■その他	みんなの広場・編集後記 第12回アグリフードEXPO大阪2019	

2018年10月号(第818号)

食べるeコマースの実力

■特集	拡大するEC市場における食品EC 販路の心は「ありがとう、またよろしく」 生産者と消費者をつなぐ、次世代の形	長瀬 直人 及川 智正 松田 恭子
■情報戦略レポート	食の志向は「健康」「経済性」「簡便化」の 3大志向に集中 —2018年度上半期 消費者動向調査—	
■経営紹介	農事組合法人東濃ミートセンター/岐阜県	
■変革は人にあり	大野 泰裕 株式会社大野ファーム./北海道	
■観天望気	食の情報の重さ	松本 邦義
■農と食の邂逅	梶浦 艶/徳島県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	旬に出会う	公文 健太郎

■主張・多論百出	日本雁を保護する会	呉地 正行
■耳よりな話	着果処理が不要なナス	吉岡 宏
■まちづくりむらづくり	阿室校区活性化対策委員会/鹿児島県大島郡宇検村	後藤 恭子
■書 評	山下 一仁 著『いま蘇る柳田國男の農政改革』	村田 泰夫
■インフォメーション	第12回「アグリフードEXPO大阪2019」の出展者を募集しています 全国六七八先の出展者の販路拡大を支援 期待膨らむ農業経営アドバイザー 生産量日本一の白花豆で地域活性化を考える	情報企画部 情報企画部 大分支店 北見支店
■その他	みんなの広場・編集後記 第12回アグリフードEXPO大阪2019	

2018年11月号(第819号)

『都市農業』という農業

■特集	都市農業振興基本法による農業の行方 都市農業のかたちが日本農業の先駆け 都市なるがゆえに吹く農業にむけた風	大西 敏夫 髙谷 栄一 榊田 みどり
■情報戦略レポート	農業景況DIは大幅下落 事業承継の候補者6割がすでに決定 —農業景況調査(2018年7月調査)—	
■経営紹介	株式会社CREA FARM/静岡県	
■変革は人にあり	井ノ倉 光博 株式会社ティーファーム井ノ倉/奈良県	
■観天望気	データの農業	神成 敦司
■農と食の邂逅	小林 陽子/三重県	青山 浩子
■フォーラムエッセイ	座右の銘はAlways Smile	スザンヌ

■主張・多論百出	株式会社農天気	小野 淳
■耳よりな話	守り抜かれた秋田三鶏	加茂 幹男
■まちづくりむらづくり	天栄村ふるさと子ども夢学校推進協議会/福島県岩瀬郡天栄村	村田 美章
■書 評	内山 節 著『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』	青木 宏高
■インフォメーション	女性農業者の経営参画を促す 鹿児島銀行との業務協力15周年 岩手の食材に海外からも注目 桜の聖母短大と「農と食」活性化プロジェクトを始動	長崎支店 鹿児島支店 盛岡支店 福島支店
■その他	認定新規就農者の皆さまへ みんなの広場・編集後記 日本政策金融公庫創立10周年	

2018年12月号(第820号)

日本2020食品産業の戦略

■特集	老舗和菓子メーカーのコラボ商品開発 市場のニーズを先読み、いち早く海外展開 生産効率化で、先ず生産性向上を図る	中丸 輝江 村田 泰夫 弘中 泰雅
■特別企画	平成30年度アグリフードEXPO輝く経営大賞 ～駆け上がる地域農業の担い手たち～ 有限会社ひるがのラファノス/岐阜県	
■経営紹介	株式会社上田畜産/兵庫県	
■変革は人にあり	藤岡 和子 蔵ウェルフェアサービス株式会社/大阪府	
■観天望気	食品産業戦略	中嶋 康博
■農と食の邂逅	前岡 美華子/鳥取県	青山 浩子
■耳よりな話	和牛の受胎率が下がっている？	平子 誠

■主張・多論百出	株式会社マネーフォワード	瀧 俊雄
■書 評	ユヴァル・ノア・ハラリ 著、柴田 裕之 訳『サピエンス全史 上下』	宇根 豊
■まちづくりむらづくり	清流の会/秋田県南秋田郡五城目町	金澤 幸則
■その他	AFCフォーラム総目次(2018年1月号～12月号) みんなの広場・編集後記 第12回アグリフードEXPO大阪2019	

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆一〇月号「主張・多論百出」、日本雁を保護する会会長の呉地正行さんの「ご飯もおかずも取れる水田文化をよみがえらせる」で、水田雑草のコナギを食用として商品化するという発想が面白かった。

現在、私は肥料も除草剤も使用しない自然栽培で米を作っている。田植え後は一週間に三回、手押しの除草機を使って除草している。この作業をしないとコナギが一面に繁殖し、米の収穫がほとんどできない状況になる。

東南アジアでは、おいしい野菜として料理にコナギが利用されており、栄養価も高いのであるならば利用価値があると期待できる。

(岡山県 山部慎一)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004
東京都千代田区大手町一丸四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

AFCフォーラム

編集

鳴谷 元 西山 大也 高雄 和彦
柴崎 勇太 城間 綾子 前島 幸子
鈴木 晃子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

編集後記

④初めてのアルバイト先が、ある食品製造工場でした。高校時代、冬休みを利用した期間限定の仕事で、製造ラインに並び黙々と作業していた記憶があります。あれから三〇年近くたちましたが、食品製造業界の生産性があの頃のままでとしたら、「食品産業戦略」の通り生産性向上三割増を目指す必要があるでしょう。(西山)

④経営紹介で取り上げた「上田畜産」。代表取締役の上田さんは「うちと同じ飼料で牛を育てれば、皆同じような味の牛になるよ」と取材時に謙遜されていました。そうではないことは本文で触れた通りですが、さすが引く手あまたの但馬牛「但馬玄」。お値段も当然一流であり、感動の一端しか味わうことができません…無念！(高雄)

④「アグリフードEXPO 輝く経営大賞」今年度受賞者を今号、来月号でご紹介します。八月に行われた授賞式で、奥村さんは「就農時『百姓ではなく経営者になる』と志を立て取り組んできました。大賞を受賞したことで経営者としての自信が付きました」と話していました。写真(一五頁)は奥村さんの気持ちを雄弁に語ります。(城間)

④「まちづくりむらづくり」の金澤さんのお話で、初めてスギナ茶の存在を知りました！「ツクシはかわいけれどスギナは厄介なもの」というイメージがありました。スギナのレストラン・清流の森には、ストセットもあるそう。その地ならではの味、ぜひ体験してみたいです。(前島)

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第12回 アグリフードEXPO大阪 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月20日(水) / 21日(木)

10:00~17:00

10:00~16:00

主催

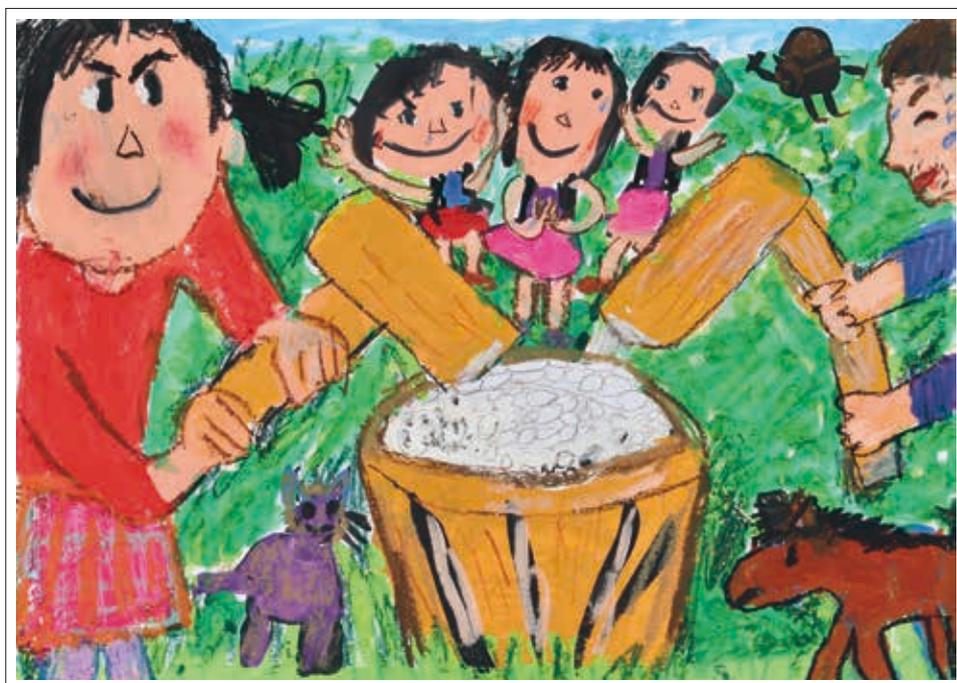
日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



日本2020食品産業の戦略



「みんなでおもちつき」高田 珠理 神奈川県綾瀬市立綾西小学校

■AFCフォーラム 平成30年12月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻9号(820号)
 ■発行/ (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/ 株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 〒7原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円 本体価格476円

